

開港百年と 作詞家星野哲郎

横浜に関する歌は、古くからたくさんあり、代表的なものを紹介している、例えば次のような文献がある。『市民グラフィコハマ』第七七号の特集『『歌のヨコハマ』七〇年』や、『マイウェイ』六九（はまぎん産業文化振興財団）の「横浜ふるさと歌物語」を見ると、明治以降、横浜に関する歌の数々を確認することが出来る。

この中には「流行歌」や「新民謡」のほかに、横浜市などの行政機関が、節目のイベントなどを記念して制作したり、歌詞・曲を募集したりした歌もある。著名なところでは、現在も歌われている「横浜市歌」は、明治期の開



写真1 横浜開港百年祭「歓喜の港」の合唱 1958年5月10日
(広報課写真資料)

港五〇周年のときに制定されている。

一九五八（昭和三三）年、横浜開港百年祭は、五〇周年以来の大きな節目であり、やはり歌の募集が行われている。県市などで組織された開港百年祭実行委員会では、横浜開港百年の歌の歌詞を募集し、応募総数一一三〇件から、大佛次郎・小船幸次郎等の審査により選定している。この歌詞は、西条八十が補作、高木東六が作曲し、「歓喜の港」として、渡辺はま子、三浦洸一の歌唱により、ビクターからレコードが発売された。また、開港百年祭では、小船幸次郎の指揮により合唱された（写真1）。しかし、イベントの歌であったために、後には忘れ去られた歌となっている。

これとは別に、昭和から平成にかけての著名な作詞家である、星野哲郎の年譜には、一九五七（昭和三二）年、開港百年を記念して募集された歌に応募した事が記載されている。その際の応募曲「浜っ子マドロス」・「みなと踊り」は一位・二位となり、審査員の一人であった船村徹に誘われて上京し、本格的に作詞家の道を歩むこととなる契機となった。この歌詞は、船村徹が作曲し、美空ひばりによりレコーディングされて発売されたので、著名な歌といっていられる。

しかし、この時の歌募集については、五八年の開港百年祭とは直接的な関わりがなく、横浜では、余り知られていないようである。そこで、この歌募集

の経緯について、紹介していこう。

「横浜の歌」募集

一九五七（昭和三二）年二月後半に、次のような告知が『産経時事』紙面に掲載された（二月二十八日）。

なお、『産経時事』

告知は「開港百年記念／横浜の歌募集」とのタイトルで、一八五八（安政五）年、日米修好通商条約が調印されたから、翌五八年が一〇〇年になるので、「本社では、近代日本の発足となった横浜開港を記念」して、「横浜の歌」を募集するという内容であった。

主催は、横浜市・産経時事、後援には、神奈川県・横浜商工会議所・横浜銀行・神奈川県観光協会・日本コロムビア株式会社であった。締め切りは、同年三月二〇日、送り先は、産経時事の横浜支局（写真2）であった。

具体的な規定は、「横浜開港をたたえ広く港を歌ったもので、大人にも子どもにも歌え、長く愛誦されるような歌詞」で、三番から四番までが必要であった。このように、「横浜の歌」と言っても、開港記念であることから、港に関わる歌詞が求められていた。

審査員としては、内山岩太郎神奈川県知事・平沼亮三横浜市長・半井清横



写真2 産業経済新聞社横浜総局 中区尾上町
1960年3月 (広報課写真資料)
1958年産経時事から産経新聞に紙名が変更された。

浜商工会議所会頭の神奈川県・横浜関係の首長等や、作詞家の石本美由起、作曲家の船村徹、木下英二産経常務、河島醇日本コロムビア芸芸部長が予定されていた。

賞金・賞品は、一等五万円、副賞はコロムビアのラジオ電蓄、二等三万円、副賞は同社のラジオで各一名、佳作は三名で五千円ずつであった。

主催や後援、審査員の顔触れを見ると、横浜市との関わりが深いことが分かる。しかし、期日が短期間であったためか、募集の記事は、月刊の『広報よこはま』には掲載されていない。このことから、産経時事の提案・主導によって企画され、進められていたと考えられる。

歌詞選定審査会

「横浜の歌」の募集は、三月二〇日に締め切られた。締め切りを報じた記事によると、『産経時事』三月二二日※各課、「県下はじめ全国から寄せら

れた歌詞は予想外の全国的人気を集め」ており、三月一五日頃から到着する歌詞が急増し、締め切りの二〇日には二〇〇通を超える応募が到着した。最終的には、一二三九編の歌詞の応募があり、そのうち、県内は二二四編で、残りの一〇〇〇編以上が全国各地から応募されていた。

応募作品から「横浜の歌」を決める審査会は、三月二五日、ホテルニューグランドにおいて行われた（『産経時事』三月二六日※各課）。審査員は、

最初の発表とは若干異なり、審査委員長内山知事、田中省吾市長代理、二宮良三郎横浜商工会議所総務部長、草野徳義市広報課長、西野武雄横浜蓄音機商組合長、作詞家石本美由起、作曲家船村徹、林日本コロムビア企画課長、原田同社ディレクター、木下産経時事常務、渡辺同社横浜支局長であった。

冒頭、田中市長代理が、高等学校時代に寮歌に応募して一席を取ったことがあったので、張り切ってきたなどと発言して、談笑のうちに審査に入ったとのエピソードが報じられている。

まず、一〇〇〇編を超える応募の中から、入選候補作として一三編が選定された。この中から、一等は「歌詞曲」として格調高いもの、二等は「民謡調で老若男女がだれでもくちずさむことができ、自然にリズムに乗って踊り出すような親しみのあるもの」との基準で選考が進められたようである。

このうち、二等の民謡調の選考には、

意見が多く出されたようで、西野武雄からは、「地元の民謡協会の意向もくんで」、「渋いもの」と「若者向き」を織り交ぜたものとの意見や、船村徹からは、「横浜的な言葉にとらわれず、ミナト、船、海などで十分に横浜の情景を言いつくしリズムカルな調子のものである」などの意見も出されたと紹介されている。最終的には、「船村氏の作曲に期待すること全員異議なく」、入選二編と佳作三編を選定した。

内山審査委員長は、「横浜だけでなく全国民に親まれるものを選んだ」と述べ、作曲を担当する船村徹は、「全国の人にアツピールするような横浜の歌の決定版ともいえるべきものを作曲するつもりです」と抱負を述べている。このように「横浜の歌」は、全国に発信する意図を持っていた。

記事では、この入選・佳作は四月一日の紙面で発表、また、船村徹作曲、美空ひばり「吹込み」でレコーディングされ、五月四日県立音楽堂において発表される予定との告知もされた。

入選作の発表

告知のように、四月一日付『産経時事』紙面で入選・佳作が発表された。

東京本社版には、当初予定されていた審査員の名前と、一等、二等、佳作の賞金・賞品と、作品名、受賞者の住所氏名が掲載された。最初に書いたように、一等が「浜っ子マドロス」、二等が「みなと祭り」で両詞ともに山口

県在住の星野哲郎、佳作は、岸田繁「ハマの波止場はふるさとなのさ」、小島喜美雄「ミナト横浜かぞえ歌」、斎藤崇男「ミナト横浜よいところ」の三編、小島と斎藤は神奈川県在住であった。

一・二等が同じ人の作品であったことには、二五日の審査会で異論があったという。しかし、船村徹が、良い詞ならば同じ人でも良いのではないかと強硬に主張し、最終的には審査委員長の内山知事が結論を出したという（小西良太郎『海鳴りの詩』七二〜七四頁）。

『産経時事』地方版（※各課）には、一等・二等の歌詞が掲載され、それとともに、受賞者の星野哲郎の経歴が詳細に掲載され、コメントも載せられていた。受賞者の紹介には、「まさに玄人はだし」夢の「港」を見事な歌詞に「この見出しが付けられ、「マドロス生活」を夢みて」清水商船高等学校に進み、卒業後、日魯漁業に入社しトロール船に乗るも、一九四八（昭和二三）年病

気のために下船、以後、闘病生活のかわら詩作に励み、五二（昭和二七）年コロムビア歌謡コンクールに入選し世に出た等の経歴が掲載されている。

星野哲郎が後に書いたものによると、（星野『紙の舟』二〇〜二九頁など）、病床で文章を書くことを覚え、コロムビアのコンクールに入選したことをきっかけとして、作詞家の石本美由起が主宰する歌謡同人誌に誘われ、作詞の勉強をしながら、いろいろなコンクール等に応募していた時代であった。

この間、NHK放送開始三〇周年記念ラジオ歌謡や、小野田市政一五周年記念で一等となり、記事のように「玄人はだし」と言われるようになっていた。新聞に掲載されたコメントでは、「二十一年練習船海王丸の甲板上で山下パークの緑を遙かに望みながら卒業式をした港」であったが、「余り身近にいないということがよい面ばかりを思い出させる。私の心の中にある横浜は現実よりも夢の方が多くい訳ですから「横浜の歌」を書かされる場合その方がかえっていいのではないですか」と、身近でないためにかえって「夢」のような良い面が思い出されて、それが良いのではないかと述べ、横浜の「日本だけじゃない世界のマドロスさんたちのオアシス」と言うところを書きたかったと語っている。

この「横浜の歌」が選定されたこと

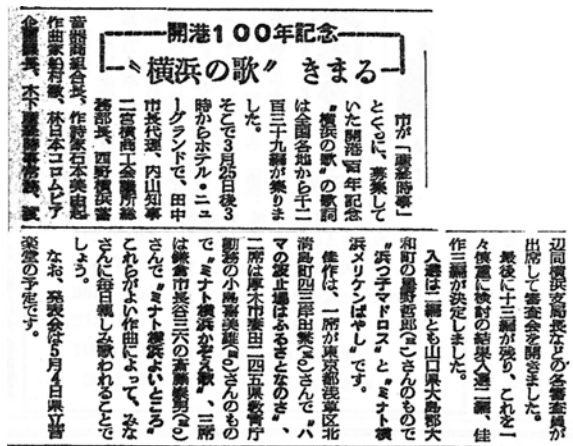


写真3 『広報よこはま』第98号の記事 1957年4月
スペースの都合上、段の位置を移動した。

は、『広報よこはま』にも掲載されている。しかし、歌詞の掲載はなく、二位のタイトルを「ミナト横浜メリケンばやし」としているなど、先の募集の告知が無いことも合わせて、市側の関わりは余り深くないことを感じさせる。

なお、新聞記事・『広報よこはま』ともに、五月四日県立音楽堂において発表会が行われる旨を報じている。さて、星野哲郎は、師と仰ぐ石本美由起からの電報で入選を知った。また、先の新聞記事も送ってもらったという。その後、美空ひばりのレコーディングに合わせて上京する。四月二二日、千代田区内幸町の日本コロムビアへ赴き、作曲家の船村徹と美空ひばりに初めて対面する。船村徹は、星野哲郎に対し、賞金が入ったので上京してはどうかと勧め、ここから、本格的にプロの道へ進むこととなった。

横浜の歌発表会

五月四日、県立音楽堂において、横浜の歌発表会が行われた。しかし、この発表会を報じた新聞記事は、見つけられていない。そのため、誰が出席し、何が行われたのかは、ほとんど分からない。その中で、市史資料室所蔵「広報課写真資料」には、この時の様子を撮影した写真が残されており、会の様子をうかがうことが出来る。

写真4では、壇上に一三名（他の写真と合わせて）が座り、田中省吾市長代理が挨拶をしている。田中の後ろに



写真4 横浜の歌発表会で挨拶をする田中省吾市長代理
1957年5月4日 (広報課写真資料)

は内山岩太郎県知事の姿が見える。その他の人達は確認できないが、審査員の面々であろうか。上の横断幕には、「横浜の歌発表会」とあり、その上には「横浜開港百年記念」と書いてあるようである。主催は産経時事、後援に横浜市・神奈川県観光協会・横浜商工会議所、協賛に日本コロムビア株式会社・横浜蓄音機商組合・横浜ネットカチーフ振興会であった。このように、横浜市は発表会の主催では無かった。しかし、横浜市と産経時事の旗があることから、両者が中心であることには変わりはないようである。また、別の写真では、表彰状のようなものを渡しているシーンがあるので、受賞者が来ていたようである。しかし、星野哲郎が来ていたかどうかは確認できない。

写真5は、当日の出演歌手で、島倉

千代子等が出演していたことが分かる。一方で美空ひばりの写真はなく、「浜っ子マドロス」等は、ひばりの歌では披露されなかったようである。



写真5 横浜の歌発表会の出演歌手(島倉千代子等) 1957年5月4日



(広報課写真資料)

とところで、後援の横浜商工会議所会頭半井清の手帳(半井清資料E-34)には、「1時(12・30)音楽堂 横浜の

歌発表会 挨拶、Miss Univers Miss World発表 産経時事」とあり、半井が、会頭として挨拶をする予定であったことが分かる。しかし、写真では確認できず、実際に本人の挨拶があったのかどうかは不明である。また、ミス・ユニバース、ミス・ワールドの何らかの発表(県代表?)が予定されていた。『産経時事』三月一日には、主催産経時事で「東京代表を募る」という告知が掲載されており、横浜の歌発表会とミスの発表は、産経時事主催イベントとして続けて行われたのであろう。

なお、翌年五月一日に行われた開港百年祭の第二部歌謡大会では、渡辺はま子等とともに、美空ひばりが出演し、「浜っ子マドロス」を歌っている。

【参考文献】

星野哲郎『紙の舟』(マガジンハウス、一九九〇年)、小西良太郎『海鳴りの詩』(ホーム社、一九九三年)、『市民グラフィック』(第七七号)横浜市民局広報課広報センター、一九九一年、『マイウェイ』(六九)はまぎん産業文化振興財団、二〇〇八年)、曾根妙子『資料紹介 戦後の市政記念事業と市史の編纂』(『市史研究よこはま』一四)、『会員並特定商工業者名簿』(横浜商工会議所)、『横浜市職員録』、『産経時事』は、東京本社版(マイクروفイルム)の他、資料室所蔵横浜市各課文書(スクラップ)に貼付された地方版による(※各課)。